

## アラビヤナイト

### 四、船乗シンドバッド（菊池寛）

バクダッドの町に、シンドバッドという、貧乏な荷かつぎがいました。荷かつぎというのは、鉄道の赤帽のように、お金をもらって人の荷物を運ぶ人です。

ある暑い日のお昼から、ずいぶん重い荷物をかついで歩いていましたが、しずかな通りへさしかかった時、大そうりっぱな家が立っているのが、目に入りました。シンドバッドは、その門のそばで、少し休むことにしました。

その家は、とてもりっぱでした。シンドバッドは、まだこんなにはりっぱな家を見たことがありませんでした。家のまわりの敷石の上には、香水がまいてありました。

シンドバッドの足は、つかれて、熱くなっていたものですから、その敷石は大へん気持がようございました。

そして、開いてあるまどからも、何ともいえないいい香りが、おつてきていました。

シンドバッドは、まあ、こんなりっぱな家には、いったい、どんな人が住んでいるのだろうかと思いました。

それで、玄関に立っている番人に、「これはいったい、どなたの家ですか。」と、聞いてみました。

この番人は、ずいぶん上等の着物を着ていましたが、シンドバッドの言葉を聞いて、目をまるくしました。そして、

「まあ、お前さんは、バクダッドに住んでいながら、私の主人さまの名を、知らないというのかい。船乗のシンドバッドさまと違って、世界じゅうを船で乗りまわして、世界じゅうで一番たくさん、ぼうけんをした方じゃないか。」と、言ったのでした。

シンドバッドも、今までたびたび、このふしぎな人の名前と、その人が大したお金持であるといううわさは、聞いていました。それで、ははあなるほどと思って、もう一度、その御殿のような家を見上げました。それからまた、上等の着物を着ている番人を、じろじろ見ていました。そのうち、だんだん悲しくなってきたし、また、ねたましくもなってきました。

「あああ。」シンドバッドは、そう、ため息をついて、荷をかつぎ上げました。そして、天をあおぎながら、ひとりごとを言ったのです。

「まあ、なんて、この家の主人と、私とは、ちがうのだろう。まるで、天と地とのちがいだ。この家の主人は、毎日々々、お金を使いたいだけ使って、その日その日を楽しく遊ぶよりほかには、何にもすることがないのに、私ときたら、朝から晩まで、せつせと汗を流して働いても、やっと、小さいパンを少しぼちしか、買うことができないんだ。ああ、ああ、まあどうしてこの人は、そんなに仕合せになれたんだろう。そしてまた、私は、どうしてこう、年がら年じゅう貧乏なんだろう。」と。

そして、三十メートルばかり歩いてみると、一人の召使

が追っかけて来て、後からヒンドバッドの肩をたたきました。そして、

「家のだんなさまが、お前さんに会いたいから、つれて来いと、おっしゃられた。さあ、ついておいで。」

貧乏な荷かつぎは、びっくりしました。きつと、さっきのひとりごとが、聞えたんだな、と思ったものですから。

けれども、召使は、そんなことにはおかまいなしで、さつさとヒンドバッドを家の中へつれて入り、大広間へ通しました。

大広間には、大勢のお客さまが、テーブルをかこんで腰かけていました。テーブルの上には、おいしそうなごちそうが、いっぱいならべてあります。一ばん上座に、まっ白いひげをはやしたりっぱなおじいさんが、どつしりと腰かけていました。この人がヒンドバッドだったのです。

ヒンドバッドは、びっくりしているヒンドバッドの方を向いて、にこにこしながら、自分のとなりへ来て腰をかけるようにと、手まねをしました。

そして、ヒンドバッドが腰をかけると、テーブルの上のごちそうを、とってやるようにと、召使に言いつけました。

召使は、ヒンドバッドの前の皿に、ごちそうをたくさんもり上げ、コップには、上等のお酒をなみなみとつぎました。

ヒンドバッドは、これは、ゆめではないかと、思いはじめました。

ごちそうをたべ終わってから、ヒンドバッドはヒンドバッドの方を向いて、さっき、まどの外で、何を言っていたのか、

と聞きました。

ヒンドバッドは、大そうはずかしくなつて、思わずうなだれてしまいました。そして、

「だんなさま、ごめんください。あの時は、大へんくたびれていたものですから、つい、ばかげたことを言つて、失礼いたしました。どうぞ、お気におかけくださいませんように。」と、言いました。

ヒンドバッドは、

「いや、なんで私が、お前さんをとがめたりするもんですかね。私は、お前さんを、ほんとうに気の毒だと思つていますよ。けれどもお前さん、私が、しじゅうのんきにくらしているのだと、思つちゃあこまります。それからまた、らくらくとこの財産をつくり上げたと思つても、いけませんよ。これまでにするには、何年も何年も、全く命がけでかせいだからなんです。」と、言いました。

それから、ほかのお客さまの方へ向きなおつて、

「そうです、皆さん、私が今までに出あつた数々のぼうけんは、どなたにだつておできになることはありません。私がきょうまでにした七へんの航海の話は、まだ一度もお耳に入れたことがありますでしたが、もしも皆さんが聞きたいとお望みになるのなら、今晚からはじめてもいいと思います。」と、言いました。

それから召使に、荷かつぎの荷物を、家までとどけてやるように、と言いつけました。

ヒンドバッドは残つて、一番はじめの航海の話聞くこと

になりました。

一番はじめの航海の話

私の父は、かなりたくさんの財産を残して死にました。その時分、私はまだ若かったものですから、それをむだ使いして、も少しですっかりなくなるところまでゆきました。しかし、これはうっかりしていると、貧乏人になってしまうぞと、気がついたものですから、急に大決心を起しました。そして、残っているお金をかぞえてみて、商売をすることにきめました。それから私は貿易商人の仲間へ入り、船に乗りこむことにしました。次から次と、船がつく港で、持って行った品物をお金にしたり、また、あちらの品物ととりかえっこをしようと思ったからです。

まず、私の、一番はじめの航海がはじまりました。

はじめの二三日は、私はいざいざ、船によいました。けれども、やがて、だんだんなれてきて、よわなくなっていました。

さて、ある夕方のごとくでした。風がびったりとしずまって、船のゆれも、ばったりとまってしまいました。

ちょうどその時、私どもは、青々と草のはえた、平たい小さな島のそばを走っていたのです。その島は、まるで牧場のようで、その向うに青々とした海が見えていました。船長はみんなに、この島へ上って、少し休んでもいいと言いました。私どもは大よろこびで、さっそく、この緑の牧場に上りま

した。そして、そこらじゅうを歩きまわったり、寝ころんだりしました。中でも、私たち五六人の者は、たき火をして、晩ごはんをこしらえようとしました。

やっと、たき火がもえついた時分でした。船から、大きな声で、

「早く、帰って来ーい。」  
と言う声が、聞えました。

私どもが、島だとばかり思っていたのは、ほんとうは、ねむっていた、くじらの背中だったのです。

みんなは、波打ぎわへつないでおいたボートをめがけて、いちもくさんに走り出しました。けれども、私がまだボートまで行きつかないうちに、早くも、このくじらは、海の中へもぐってしまったのであります。

私は水の中で、ずいぶんもがきました。そして、やっと板きれにとりつきました。それは、たき火をするために、船から持って来たものでした。

ところが船では、何かごたごたがあつて、私のことなんか忘れていたらしいのです。船長は、風が吹き出すと、船を出してしまいました。

私は、波にもまれながら、とうとう、おき去りにされてしまったのであります。

それから一晩じゅう、私は水につかっています。そして、朝になった頃には、もうへとへとにくたびれてしまって、死ぬよりほかには仕方がないと思っていました。

けれども、ちょうどその時、大へん大きな波がやって来ま

した。そして、私を持ち上げたかと思うと、ある島のがけの下へ打ち上げました。

うれしいことには、そのがけは、よじのぼることができませんでした。この上は、青々と草のはえた原っぱでした。そこで私は、まず何よりも休みました。

すぐに気分がなおりました。けれども、大そうお腹がへっていたので、何かたべる物はないかとさがしに出かけました。少し行くと、おいしそうな果物の木がありました。そのそばに、きれいな水がふき出している泉もありました。

私はそこで、まず食事をすまして、また何かほかにないかと思つて、島の奥の方へ歩いて行きました。

すると、ほどなく牧場にきました。馬が、あちこちにはなしてあつて、みんな草をたべていました。

しばらく、ぼんやり立っていますと、人の話し声が聞えてきました。耳をすましていると、それがどうも、地の下で話しているようなのです。

まもなく、草の間にかくれてあつた穴から、ぬうーつと人が一人出て来ました。そして、私を見つけると、お前はだれか、どこから来たのか、とたずねました。

それから、私を穴の中へつれて入りました。穴の中には、仲間らしい人がたくさんいました。そして、自分たちは、この島の王さまの馬がかりで、馬を買いに、この牧場へ来ているのだと言いました。

私に、おいしい食べ物を入れて、

「お前さんは、ほんとうに運がいい人だよ。もし、あした来

たんだったら、もう私たちは帰ってしまったからね。道を教えてあげることが、できやしなかつたんだよ。」と、言いました。

あくる朝早く、私たちは出立しました。そして都につきました。

王さまは私をよろこんで迎えてくださいました。私が出あつたさいなんの話をお聞きになり、

「この者に、不自由をさせないように、気をつけてやれ。」と、家来にお言いつけになりました。

さて、私は、大へん船がすきでしたから、そこにいる間、毎日のように、はとばに出かけて、ボートから荷物をおろすのを、見てくらしめました。

ある日のこと、いつものように、あちこちの船につんである、荷物をながめていました時、その中に、私の名を書いたこうりが、たくさんつのであるのを見つけました。それで、すぐに、その船長のところへ行つて、そのこうりの持主はだれです、と聞いてみました。

すると船長は、

「ああ、それはね、バクダッドの商人の、シンドバッドという人です。その人は、航海に出るとまもなく、むごたらしい死に方をなすつたのです。ある時、この船に乗っていた人たちが、ねむっていた大きなくじらの背中を、草のはえている島だと思つて、その上に上つたのです。そして、たき火をしました。すると、熱いので、くじらが目をさまして、いきなり海へ沈んでしまったのです。それで、たくさん人が死に

ました。その中にシンドバッドさんもいたのです。そういうわけですからね、私はこの品物をすっかり売って、お金にして、あの方の身内みうちとか、しんるいとかいう人でもあったら、お渡ししたいと思っっているのです。」

と、話したのであります。

それで私は、  
「船長、私とそのシンドバッドです。このこうりは、みんな私のです。」と、言いました。

すると、船長は、急におそろしい顔をして、  
「まあ、世の中はゆだんもすきもありやしない。おい、お前さんが何と言ったってね、私は、ちゃあんとこの目で、シンドバッドが海に沈んだところを見たのだけ。」  
と、どなりつけました。

私は、すぐに、あれから後のことを何もかも船長に話しました。ところへちようど、船に乗っていた商人たちが出て来て、私をほんとうのシンドバッドだと言ってくれました。

船長は、はじめて、大そうよろこびました。そして、  
「すぐに、荷物をお引き取りください。」と、言いました。

私はその中から、なるべく見事なものをえらび出して、王さまにさし上げました。それから、あとの品はみな売りはらって、びやくだんと、につけいと、しょうがと、はっかと、  
丁香じやうきやう香かうとを買い入れました。

それからもう一度、この船長の船に乗って出かけました。その帰りみち、私はある島で、持って来た香料かうりりやうをみんな、大へん高く売ることができました。それで、いよいよバクダ

ッドへ上る時には、一万円の金貨ができていました。家の者たちは、私が帰って来たので、大へんよろこびました。

それから私は、少しばかりの土地を買って、小ざっぱりした家を立てました。そして、安楽あんらくにくらして、こわい目にあつたことは、みんな忘れてしまおうとしました。

ここで、シンドバッドは、一番はじめの航海の話を終りました。そして、音楽をはじめるように、また、もっとごちそうを持って来るように、と言いつけました。

さて、それがすんだ時、シンドバッドは、金貨で百円ほどを、シンドバッドにくれました。そして、もしも二度めの航海の話が聞きたかつたら、あすの晩の、今時分にまたおいで、と言いました。

シンドバッドは、大いそぎで、自分の家へ帰って行きました。

皆さん、その夜、まあどんなにシンドバッドのおかみさんや、子供たちがよろこんだか、お察さつしくください。

さて次の晩、シンドバッドは、一番いい着物を着て、シンドバッドの家へ行きました。

ゆうべと同じように、大そうなごちそうが出ました。そして、それがすんだ時、

「皆さん。今晩は、二度めの航海の話をしようと思います。これは、ゆうべの話よりか、もっともつとふしぎなことがたくさんあります。」と、シンドバッドが申しました。

## 二度めの航海の話

家へ帰って、しばらくの間は、私も楽しくくらししていました。しかし、まもなく、私は、ぶらぶらとその日その日をおくることが、いやになりました。そして、海の上へ乗り出して、波の上をとぶように走ったり、帆づなをびゅうびゅうならせて吹いてゆく、風の音を聞いたりしたくて、たまらなくなりました。

そこで私は、いそいでいろいろの品物を買いつめ、もう一度、外国へ商売に出かけることにしました。

それから、つごうのよさそうな船に乗って、大勢の商人たちと一しよに、いよいよ二度めの航海に出かけました。

船は、みちみち、いろんな港につきましました。私どもは、そのたんびに、持って来た品物売って、大そうもうけました。そして、すっかり品物売りはらってしまつてから後のことでした。ある日のこと、私たちは、ある島につきましました。

その島は、ほんとうに美しい島でした。エデンの園かと思われるほど、きれいなところでした。たくさんの花が、にじのように咲きみだれて、じゅくした果物が、おいしそうにぶさになって、なっていました。

私は、まずこの木の下へどっかりとすわりました。そして、あたりを見まわしました。

そこら一面、見れば見るほど、美しゅうございました。私は、持って来た食べ物をたべたり、お酒を飲んだりしました。

それから目をつぶりました。そばを、しずかに流れている、小川の流れの音が、歌のように聞えてきました。そのうちに、ぼーっとしてきて、私はねむってしまった。

それから、いったい、どれだけ時間がたったのかわかりませんが、ふと目をさますと、一しよに来た人たちは、一人もいなくなっていました。びっくりして、海の方へさがしに行ってみますと、まあ、どうでしょう。船は、とっくに出てしまっているではありませんか。そして、はるか向うまで走って行って、ちょうど白い点を打ったように見えるだけであります。私は、この島におき去りにされてしまったのです。こんなことになるほどなら、どうしてあのまま、家にじっとしていなかったのかと、泣いて残念がりましたけれど、仕方がありませんでした。

私は、どうにかして島から出て行くことはできないものかと思つて、高い木にのぼつて、方々を見まわしました。

はじめに海の方を見ました。けれども、海には何にもありませんでした。

それで、こんどは、陸の方を見ました。すると、島のまん中ほどに、大きな、白い、円屋根のようなものが見えました。今まで一ぺんも、そんなものを見たことがないので、それが何だか、ちっともわかりませんでした。

私は、ともかく、木からおりました。そして、大いそぎで、その白い円屋根の方へ走って行きました。

しかし、いよいよそばまで行つても、それはかいもく何だかわかりませんでした。ちょうど大きなまりのようで、すべ

すべして、とても、よじのぼることなどできませんでした。また、それかといって、中へ入って行こうにも、戸らしいものや、入口らしいものが、一つもありませんでした。どうにもしようがないので、私はただ、ぐるぐるそのまわりをまわっていました。

すると、にわかにか空がくもってきて、見る見る夜のように、まっ暗になってしまいました。

それで、おそろおそろ空を見上げますと、大きな鳥がまいおりに来て、そのつばさのかげのために、こんなになつたのだということがわかりました。鳥は、またたくまにおりに来て、白い円屋根の上へとまりました。

この時、ふと私は思い出したことがありました。それは、水夫たちに聞いていた、ロックという鳥のことです。それで、すべすべした円いまりは、その鳥の卵にちがいないと思いましたが。

こう思いつくと、すぐに私は、頭にまいていた布をといて、つなを作りました。そして、それを自分の腰のまわりにまわして、両方のはしを、しっかりとロックの足にむすびつけました。

「しめたぞ。この鳥は、今に、とび上るにちがいない。そして、きつと、私をこの島から、つれ出してくれるにちがいない。」私は、こうひとりごとを言って、よろこびました。

はたして、まもなく、私は地から持ち上げられました。そして、雲にとどくかと思うまで高くのぼってしまいました。それからまた、だんだん下へおりにゆきました。そして、地

につきました。私は手早く、ずきんの布をときました。そしてロックからはなれました。

ロックにくらべると、私はお話にならないほど、小さいものでした。それでロックは、まるきり私に気がつかなかったらしいのです。ロックはすぐに、そばに寝ていた大きな黒いものの方へとびかかってゆきました。そして、それを口ばしでくわえて、とび上ってしまいました。

皆さん、それから私が、つくづく、ほかにもたくさん寝ていた黒いものを見た時、まあ、どんなにおどろいたか、お察しください。それはみんな、黒い大きな蛇へびだったので。

なお、よくよくあたりを見ますと、ここは、岩のかさなりあつた、深い谷底でした。どちらを向いても、びょうぶのうにけわしい山が、そびえていました。そして、岩の間には、このおそろしい蛇よりほか何にもいませんでした。

「ああ、こんなことなら、いっそあの島にいた方が、ましだった。わざわざ、もつとひどい目にあうために、この島へ来たようなものだ。」と、私は泣き泣き、ひとりごとを言いました。

そして、じつと岩を見つめていますと、何だか、きらきらとよく光る石が、そこら一面にちらばっているではありませんか。ふしぎだなと思って、ずっとよって見ると、それがみんな、大へん大きなダイヤモンドでありました。ちょうど小石くらいのもので、私は、とび上るほどよろこびました。

しかし、すぐに、おそろしい蛇が、私にかみつこうとして、

ねらっているのに気がつきましたから、そのよろこびはどこへやら、背中にぞっとさむけがたちました。

蛇は、どれもこれも、大そう大きなものでした。象でも、一口にのみそうなものばかりです。昼間はロックがこわいで、じっとしていても、夜になると、のたりのたりとはいまわって、食べ物さがすのでした。

私は、日がくれないうちに、岩の中の穴を見つけて、その中にしゃがんで、ふるえながら夜のあけるのを待ちました。そして朝になってから、もう一度、谷へ出て行きました。

さて、これからいったい、どうしたらいいのだろうと、じっとすわって考えていますと、ちょうど目の前へ、ころころと大きな生の肉のきれが、ころがって落ちてきました。それからまた、同じようなのが落ちてきました。そして、次から次と落ちてきて、見る見るもり上ってしまいました。

この時、私はふと、ある旅行家から聞いた、ダイヤモンド谷の話の思い出しました。それは、毎年わしが卵をかえす時分になると、商人たちが、高い山へのぼって行って、生の肉のきれを、谷底をめぐるところがし落すのでした。すると、谷にちらばっているダイヤモンドが、その肉の中へ、はまりこみます。その肉を、わしがひなにやるために、くわえて帰って来るのです。商人たちは、そこを待ちかまえていて、わしを巣から追い出して、肉の中のダイヤモンドをとるという話であります。

やがて、わしがまいさがって来て、肉のきれをくわえて、とび上ってゆきました。それを見ているうちに、ふとある考

えが浮かびました。それで、とてもだめだと思ってしょげていた私は、元気を出しました。

そこで、まずあたりをさがしまわって、なるべく大きそうなダイヤモンドを拾って、ポケットにつめこみました。それからまた、肉の一ばん大きなきれを見つけて、それを、あわずきんで作ったつなで、からだへしっかりと、むすびつけました。わしがまたすぐに、えものを取りにおりて来るだろうと思ったからです。それから、肉のきれの下にもぐって、地面の上へねそべりました。そして、どうなることかと、じっと待っていました。

するとまもなく、わしが、すうーっとおりて来ました。そして、私のからだにむすばれてあった肉をつかんで、さっととびりました。そして、高い高い山の上の、岩の間の巣の中へ、私を落しこみました。

すると、思った通り、すぐに岩の後から人が出て来て、大きな声でわしを追いたてました。わしは、びっくりして、そのままとび去ってしまいました。

この人は、この巣の番をしている商人で、肉の中のダイヤモンドをさがしに来たのでありましたが、私を見て、びっくりして、後へとびのきました。けれども、すぐに、「お前さんはここで何をしているんだ。ああわかった。ダイヤモンドをぬすみに来たんだな。」と、おこりつけました。

しかし、私は、落ちついて、「まあ、お待ちください。私はけっして、どろぼうではあり

ません。私の話をお聞きになったら、きつと私を、気の毒に思ってくださいるでしょう。そして、きつとおとがめにはならないでしょう。それから、お望みのダイヤモンドなら、ここに少し持って来ましたから。」と、言いました。

そこへ、ほかの番をしている商人たちもやって来ました。私はみんなに、今までの、あぶない目にあつた話をして聞かせました。商人たちは、私の勇気と、そんなあぶない目からうまくのがれたちえとに、びっくりして、ただただ目を見はっているばかりでした。

それから私は、手にいっぱいダイヤモンドをつかみ出しました。そして、みんなに見せました。みんなは、そんなりっぱなダイヤモンドを見たのは、はじめてのようでした。

「さあ、がっかりなさつたかわりに、どれか一つお取りください。」

と、どなりつけた商人に言いました。

すると、その人は

「では、この小さいのを一ついただきましょう。」と、言つて、きらきら光っている中から、一ばん小さいのを一つ取り出しました。

私は、もつと大きいのお取りなさい、とすすめましたが、その人は首をふつて、

「これ一つあつたら、私がほしいと思つた財産をつくることができます。私はもう、こんなあぶない思いをして、ダイヤモンドをさがしには来ますまい。」と、言いました。

それから、みんなで、港をさして出かけました。そして、

そこから船に乗つて、家へ帰ることにしました。帰りみちでも、いろいろあぶない目にあいました。けれども、ともかく、バクダッドへ帰つて来ることができました。

私はダイヤモンドを売つて、大へんなお金をもうけました。そして、たくさんのお金を貧乏人にほどこしました。そして前よりも、もつとお金持になつて、人からちやほやされるようになりました。

ここで、シンドバッドは話をやめました。そして、また百円、シンドバッドにくれました。それからシンドバッドは家へ帰つて行きました。

次の日の晩も、また、お客さまたちはあつまりました。ヒンドバッドも、やつぱりやつて来ました。

シンドバッドは、また、あぶない目にあつた話をしはじめました。すなわち、三度めの航海の話でありました。

### 三度めの航海の話

私は、しばらく家にいて、楽しくくらししているうちに、だんだん、苦しかったことや、こわかつたことを、忘れてゆきました。そしてまた、新しいぼうけんがしてみたくになりました。それに、まだ私は、家でしずかにして、ぶらぶらくらししている年ではない、と思ひました。それでこの前の時のように、品物を買ひあつめて、商売の旅に出ました。

商売は、どの港でも、大へんつごうよくゆきました。品物

がどどん売れてゆきました。そして、こんどこそは、ひどい目にもあわないですみそうだと思っっているやさき、ある日、大あらしがやって来ました。

船は、すっかり方向がわからなくなってしまうと、船長でさえも、風下かぜしものある島のかげへ来るまでは、どこをどう進んでいるのか、かいてもわからないというほどでした。

仕方がないので、私どもはともかくも、その島のかげで、あらしをよけるために、いかりをおろしました。

けれども、船長が、この島をつくづくと見た時、急にかみの毛を引きむしって、

「しまった、ここは猿さるの山にちがいない。」と、さげんだのであります。

それから船長は、この島へ来て、生きて帰った者はないのだ、という話をしました。なぜかという、この島には、人よりも猿によく似たものがたくさん住んでいて、おまけに大そう、けんかずきだということです。

船長のこの話が終らないうちに、もう小さなやつが大勢、海岸へ出て来たかと思うと、船をめがけて、ぼちゃぼちゃと泳いで来はじめました。

それが近づいて来た時、よくよく見ると、一寸法師ぼんしのようで、猿よりもにくらしいのです。そして、からだじゅうに赤い毛が、ぎっしりはえていました。

やがて船に泳ぎつくと、みんなして船を海岸へ引っばって行きました。そして、私どもを陸おかに追い上げて、こんどは自分たちばかりが船に乗って、ほかの島をさして、こいで行き

ました。

私どもは、こわごわ、そこらじゅうを歩いてみました。そして、果物や木の根を見つけて、たべました。

夕方になってから、向うに高い御殿が立っているのが、見つかりました。それで、そこにかくれるところがあるかもしれないと思って、行ってみることにしました。

御殿には、こくたんの大きな戸が閉まっています。おすと、すぐに開きました。私どもは、中庭へ入って行きました。だれもいないで、ひっそりしていました。

しかし、しばらく見まわっているうちに、骨ほねを小山のように積みかさねてあるところへ来ました。そこには、物を焼く時に使うかなぐしが、いっぱいちらばっていました。

わけがわからないものですから、私たちは、だいぶ長い間、じっとそれを見ていました。すると、太い、雷かみなりのような音が聞えてきました。みんなが、その方をふり向くと、ちょうど、こくたんの戸がそろそろと開きかかっているところでした。そして、くれないと金をまぜたような夕やけの空の中に、ぬうーつとあらわれたのは、おそろしい大入道おおにゅうどうでした。

その大入道は、松やにのようにまっ黒な色をしていて、しゆるの木のように背が高いのです。ひたいのまん中に、一つ、まっ赤かな目がありました。それはちょうど、石炭がもえている時のように、ぎらぎら光っていました。口は、まっ暗な井戸のようで、くちびるは、らくだのように胸までぶらさがっていました。そして、耳は象のように大きくて、肩のへんまでたれていました。また爪つめは、わしのようにとがっていました。

た。

私どもは、この大入道を一見見るやいなや、気をうしなつて、そのままそこにたおれてしまいました。

やがて、息をふき返してみると、大入道は、私たちを一人ずつ、つまみ上げて、そのまっ赤な目で、ていねいにしらべているところでした。

すぐに私がつまみ上げられました。私は、高いところで、ぶらんぶらんしていました。大入道は、ぐるぐる私をまわしながら、からだの方々をつねってみるのです。太っているかどうか、こうしてしらべるのです。やがて、私が骨と皮ばかりにやせているのがわかると、下へぽーんと投げました。それから、また、仲間の一人をつまみ上げました。この人も、くるくるまわされたり、つねられたりして、苦しうでした。その次には船長をつまみ上げました。この人は、みんなの中では、一ばん太っている人です。大入道は、にやりと笑って、船長をかなぐしに、ぷすりとさしこみました。そして焼きはじめました。

それから船長を、夕ごはんにしてたべてしまうと、ぐうぐうねむりはじめました。そのいびきは、一晚じゅう、雷がごろごろ鳴りひびいているようでした。

そして朝になると、私たちには目もくれないで、さつさと出かけて行きました。

すぐに、私どもは、よりあつまって、自分たちの不運を悲しみあいました。そして、どこかほかに、かくれ場をさがさうと思つて、御殿を出て行きました。

しかし、島じゅうどこにも、そんなところはありませんでした。

夜になって、仕方なく、また御殿へ帰って来ました。

すると、まもなく大入道も、外から帰って来て、また仲間の一人をつかまえて、きのうの船長と同じようにして、たべてしまいました。

次の朝、大入道が出かけて行った後、私どももやつぱり、出かけました。こんどは、もう一度この御殿へ、たべられに帰って来るくらいなら、いつそ海へ身を投げて、死ぬ決心でした。

それから、方々さがしても、やつぱりどこにも、かくれ場はありませんでした。そして、出るともなく海岸へ出てしまいました。すると、仲間の一人が、

「私たちは、もう神さまに見はなされてしまったのです。あなたにして、一人々々殺されてゆくよりも、いつそ、みんな一しょに死んでしまおうじゃありませんか。」  
と、言いました。

「なるほど、それももつともです。しかしまあ皆さん、私の考えも、ひとつお聞きください。」

と、私はそれに答えてから、口をきりました。それから、「このあたりに流れついている流木を拾って、いかだを作りましょう。そして、もしもあの大入道を殺すことができなかったら、それに乗って、にげたらよいじゃありませんか。いかがです。」

と、相談してみました。

すると、みんなこの話に、さんせいしてくれました。そして、夕方までにいかだを作り上げて、海岸につないでおきました。

さて、それから、帰りたくもない御殿へ、いやいやながら帰って行きました。きっと今晚も、だれかが殺されて、たべられてしまうにきまっていたが。

大入道は、また一人を、いつものように夕ごはんにしてたべると、大きいびきで寝てしまいました。そこで私どもは、しずかに、大きなかなぐしを二つ、取り上げました。そして、かっかっかと石炭がもえている中へ、つつこみました。そして、それがまっ赤になるのを待って、こっそりと大入道の寝ているそばへ、近よって行きました。それから、みんなで力をあわせて、そのかなぐしを、大入道の目の中へつきさしました。

大入道は、おそろしいなり声を立てて、痛<sup>いた</sup>いのと、腹が立つので、とび起きました。そして、うでをのばして、私どもをつかまえようとしました。けれども、もうめくらになっっているものですから、私どもはうまくにげまわって、すみの方にうつぶしになっていました。それで、とうとう一人も、つかまえられませんでした。

大入道は、わあわあ泣きながら、やっと、こくたんの戸のところまで行きました。そして、手さぐりで戸をあけて、まっ暗なやみの中へ消えていってしまいました。その泣き声が、いつまでもいつまでも、夜の空にごーごーと鳴りひびいていました。

私どもはすぐに、いかだをつないであった海岸をさして、

走って行きました。そして、そこで、大入道が死んでしまったのか、まだ生きているのかわかるまで、待つことにしました。

けれども、やっぱり、私たちは運が悪かったのです。夜があけてゆくにしたがつて、雷のような足音が聞えてきはじめました。それは、おこったあの大入道が、仲間を二人つれて来る足音でした。二人とも、さっきの大入道にまけずおとらずの、おそろしく背の高いやつでした。

私どもは、それを見るやいなや、大いそぎでいかだに乗りました。そして、沖<sup>おき</sup>へ向ってこぎ出しました。

すると、大入道たちは、岩を拾っては、いかだをめがけて、投げはじめました。そのため、私のいかだよりほかのいかだは、みんな海に沈んでしまいました。

私のいかだには、ほかに二人の仲間が乗っていましたが、三人とも、どうしてもここからにげたいと思いません。それで、あるかぎりの力を出して、こぎました。それで、まもなく、ほかの島へつくことができたのです。

この島には、大そうおいしい果物がありました。私どもは、たべたり、休んだりして、しばらくつかれをなおしていました。

するとにわかには、ざーざーと、おそろしいひびきが聞えてきました。そして私どもは、何だか急に気分が悪くなってしまいました。仕方がないので、じっとしていますと、とても大きな蛇が、ぬうーっとはいよって来ました。そして、あつというまに、仲間の一人をのんでしまいました。

「ああ、やっと一つのがれたと思えば、こんどは前よりも、もっと悪いことがやってくる。ほんとうに、どうしたらここからにげて行くことができるのだろうか。」  
と言って、私たちはなげきました。

それでも、助かった二人は、走りつづけて、やっと高い木の下まで来ました。そして、大いそぎで、その木へのぼりました。

その木には、運よくも、果物がなっていました。そこで二人は、まずお腹をこしらえました。

その夜、私は、一ばん高い枝にのぼっていました。また蛇のざーざーいう音で目をさしました。すると、どうでしょう、蛇は、木にぐるぐるとまきついて、今にも、たった一人の私の仲間を、のもうとしているのです。そして、あつというまもなく、また大きな口をあけて、ペロリとのみこんでしまいました。

「ああ、こうなっちゃ、もうどうしたってだめだ。晩にのまれるのを、じつと待っているよりも、いっそ、がけの上から、海へとびこんで死んでしまおう。」

こう、私はひとりごとを言いました。

けれども、海べまで来てみますと、そんなことをするのは、あんまりいくじがなさすぎると考えたのであります。

そこでまた、引き返してきて、木の枝だの、あいだの、いばらだのを、できるかぎりあつめました。そして、それをたばにして、しっかりとゆわえ、それでもって、木の下に円い小屋のようなものを立てました。そして、そのてっぺんを、

かたかくたくむすびあわせて、どこにも蛇が入って来るすきまがないように、ていねいに作り上げました。

さて、その晩も、おそろしいざーざーいう音が聞えてきました。けれども、蛇はただ、小屋のまわりを、ぐるぐるとすべりまわっているだけでした。私は、おそろしさのあまり、死んだ人のようになって、ふるえながら夜をあかしました。

こうしてまた、私は助かりました。そして、海へ出て行きました。こんどこそは、もう身を投げて死のうと、きめて行つたのです。あんなおそろしい目にあうのは、とてもがまんができませんと思ったものですから。

しかし、ありがたいことには、海べに立つて、沖の方をながめていますと、一そうの白帆しろほの、こちらへ近づいて来るのが見えました。

私はずきんとつて、むちゅうになつてふりまわりました。するとまあ、なんてうれしいことでしょう、その船からはポートをおろしました。私を助けに来るのです。

まもなく、私はその船に乗ることができました。そして、いっさいの話をしました。だれもかれも、私をかわいそうに思つて、大そうしんせつにしてくれました。そして、新しい着物を出してきて、

「そのぼろぼろになつた着物と、お着かえなさい。」と、言ってくれる人もありました。そのほか、いろんなことをして、私をなぐさめてくれました。

そんなにして、航海をつづけているうちに、びやくだんの木が、いっばいはえている島へつきました。そこで、いかり

をおろして、商人たちは島の人たちと取引をするために、陸へ上ってゆきました。

そのあとで、船長が私を呼んで言うには、

「じつは、少しお願いしたいことがあるのですが、聞いてくださいませんか。ほかでもありません。まあ、このたくさんの荷物を見てください。これはみんな、この船に乗っていたバクダッドの商人のものなのですが、気の毒なことには、その人を、ある島へ、おき去りにしてしまつたのです。それで私は、この荷物をみんな売りはらつて、そのお金を、その商人の家の人にあげたいと思つてはいるのですが、あなた、これを陸へ持つて上つて、売ってくださいませんか。もちろん、分け前はさし上げるつもりなんですが。」とのことなのです。

そこで、私は、

「それは、けつこうなお考えです。だが、その商人の名前は、何というのですか。」

と、聞いてみました。すると、船長は、

「シンドバッドというのです。」と、答えたではありませんか。

私は、ごうりについている、私の名前をしらべてみました。それから、船長に、

「その人は、ほんとうに死んだのですか。」と、聞きました。

船長は、

「それが気の毒なんです。とてもあの島では、助かっている見こみはありません。」

と、答えました。そこで、私は船長の手をとつて、

「船長、私の顔をよーつくごらんください。あなたはこの顔に、おぼえはありませんか。私こそそのシンドバッドです。」

あのロックの島にとり残された、シンドバッドです。」

と、言いました。そして船長に、いろいろこわい目にあつた話をして聞かせました。そのうちにだんだん、私がシンドバッドだということが、わかつてきました。そして、大よろこびで品物をみんなと、今までにほかの島で私の品物売つてもうけたお金とを、私に渡してくれました。

それからまもなく、私たちはバクダッドにつきました。私は、こんどの商売では、とてもかぞえきれないほど、お金をもうけていました。それで、もつと土地を買つて、またたくさんのお金を貧民どもにほどこしました。そしてまもなく、あぶなかつたことや、苦しかつたことを、みんな忘れてしまいました。

そこで、三度めの航海の話は終りました。

シンドバッドは、また、シンドバッドに百円やるようにと、召使に言いつけました。

それからまた、シンドバッドは、第四航海の話聞きに来ました。

#### 四度めの航海の話

三度めの航海の後、私は大へんゆたかに、仕合せにくら

していました。しかし、皆さん、あきれてはいけません。また私は、ただお金持で、ぼんやり家にいるのでは、どうも満足ができません。旅をして、いろいろのぼうけんをしたいと思う心が、おさえても、おさえても、どうしてもやみませんでした。

私は、また、商品を買いました。そして、仲間の商人と一しよに船に乗って、外国の港をさして、出かけました。船は、いろいろの港につきました。私もは、それぞれお金もうけをしました。

ところがある日、大あらしがやって来たのです。そして、船長でさえも、船をどうすることもできなくなっていました。

帆は風のためにぼろぼろにちぎられて、まるでリボンのようになつてしまいました。波は、何べんも何べんも、かんぱんの上をあらつて、そのうちに船は、とうとう沈みはじめました。

乗組員と、お客さまの大部分は、おぼれてしまいました。しかし、私も二三人は、やっと板きれに、とりつくことができました。そして、一晩じゅう、おそろしい思いをしなから、波にただよっているうちに、ある島へ流れつきました。

「生きていますよ、死んだ方が良かったです。」  
そう思いながら、夜があけるまで、海岸にたおれていました。

やがて、朝になってから、何かたべるものがほしくなつたので、島の奥の方へ歩いて行きました。大して歩きもしない

うちに、まっ黒な、やばん人のむれに行きあいました。

このやばん人もは、すぐに私たちをとりまいて、自分の小屋の方へ、引っぱって行きました。そして、まずはじめに、食べ物くれました。私の仲間は、それをがつがつ食べてました。けれども私は、もともと用心ぶかいたちですから、たべるふうだけしておきました。なぜかと言いますと、どうもこのやばん人もは、人間の肉をたべているらしく思われたからです。

でも、ほんとうに、たべないでよかったです。私の仲間は、食べ物のみこむと、まもなく気をうしなつてしまいました。そして、やがて気がついた時は、もうすっかり気がいなくなっていました。

これはどう見ても、やばん人もが、何かたくらんでいるのにちがいないと思いました。

その次にまた、ごほんの上にやいの油をどっさりかけて、持って来ました。この時は、

「はーあ、こうして、みんなを太らせておいてから、たべるんだな。」と、わかりました。

それとともに、私は大そうこわくなりました。それからはいよいよ何にもたべませんでした。それで、大へんやせてしまいました。だれだって、殺してたべようとは思わないほどに、なつてしまいました。

さて、ある日、年とつたやばん人が、ただ一人、番をしていきり、みんな出て行ってしまったことがありました。それで、私はやすやすとぬけ出すことができました。

私は、できるかぎり大いそぎで、森の中へ走って行きまし  
た。そしてそこで、七日ほどすごしました。

しかし、やがてまた走り出て、とうとう島のはんたいのか  
わへ行きつきました。

そこには、西洋人たちが、こしょうを取りに来ていました。  
そして私を見て、大へんびっくりしました。それから私の話  
を聞いて、なおなお、おどろいてしまいました。

「あのやばんどもは、だれだつて見つかりしだい、殺して  
たべてしまうのです。無事ににげ出して来たのは、きつとあ  
なた一人でしょう。」と、言いました。

それから私を、自分たちの船に乗せて、その国へつれて行  
きました。そして、王さまのお目通りへ、つれて出ました。

それから、みんなは、なかなかしんせつにしてくれました。  
王さまも、とくべつにお取立てくださって、高い位につ  
けてくださいました。

さて、その島は、大へんお金のたくさんある島でした。そ  
して、みやこでは、さかんに商売が行われていました。私も、  
すぐに仕合せになって、満足していました。

しかし、この島で、おどろいたことには、だれもかれも、  
馬によく乗るのですけれど、くらやあぶみや、たづなを使う  
者が少ないのです。それで、ある日、私は王さまに、

「陛下、なぜ、この国では、くらをつける人がないのでござ  
いますか。」

と、うかがってみました。

すると王さまは、ふしぎそうな顔をなすって、

「何を言ってるのかね。わしはまだ、そんな言葉を聞いたこ  
とがないよ。」

と、おっしゃったのです。

そこで私は、なめし皮を作る職人の中から、りこうそ  
うなのを一人つれて来て、りっぱなくらを作ることを教えまし  
た。そして、私もまた、あぶみだの、はくしゃだの、たづな  
だのを作りました。そして、これらがみんな出来上ってから、  
そろえて王さまにさし上げました。そして、どういうふう  
に使うということもお教えしました。

すると、すぐに王さまは、それをお使いになって、大そう  
およろこびになりました。

また、それを見て、自分の高い人たちは、だれもかれもほ  
しがりました。それで、私はまた、みんなに作ってやりまし  
た。

さて、そのうちに、私は、この島でも指おりの金持になっ  
てゆきました。

王さまは、とうとう私に、この島の美しい娘と結婚をして、  
この島の人間になってしまふように、とおっしゃいました。

私は、その美しい娘というのを見ました。すると、王さま  
のご命令通りにしたくなりました。それから二人は、一しょ  
に仲よくくらしてゆきました。私は、そろそろバクダッドの  
ことを忘れはじめました。

しかし、ある日のことでした。大へんなことが起つてしま  
いました。というのは、私がふだん仲よくしていた、近所  
のおかみさんが死んだのです。大へん気の毒に思ったものです

から、すぐおくやみに行ききました。そして、

「あんまりくよくよなさらないように。おかみさんはああして、早くおなくなりなすってても、そのかわりにあなたが、長生きがおできになりますようによ。」と、言いました。

その人は、うつむいたまま、じっと私の言うのを聞いていましたが、やがて、

「よしてください。どうして、あなたは、私がこれから長生きができるなんて、おっしゃるのです。私はもう二三時間したら、家内かみと一しよに、うずめられてしまう身じゃありませんか。……ああ、あなたはまだ、この国のおきてをご存じなかつたのですね。ここでは、妻つまが死んだら、夫はそれと一しよにうずめられるのです。そして、夫の方が先に死ねば、妻がそれと一しよにうずめられるのです。」

と、言うではありませんか。

「まあ、なんておそろしいことだろう。そんなことは、とてもほんとうとは思われない。」

私は、それを聞いて、こうさげびました。

それから、王さまに、このことをうかがいました。すると王さまは、ただそれは、この国のおきてなんだから、そうされるのだ、とおっしゃったきりでした。

それから、だれに聞いても、これをふしぎに思っている人はありませんでした。

まあなんてこわいことだろう、なんていやなことだろう、と知っているうちに、とうとうそれが、私の身の上になりかかってきました。ある日のこと、私の妻が、病気になったの

です。そして、わずかのわずらいの後、とうとう死んでしまったのです。

すると、町の人がやって来て、妻に一番いい着物を着せました。そして、髪かみには宝石をかざりました。それから、高い山の上へ運んで行きました。

山の上には、石が一つおいてありました。その石を持ち上げると、下は深い深い穴になっていました。そしてその中へ、私の妻は落されてしまいました。

私は、どうか助けてくださいと、ずいぶんのみました。しかし、だれも、私は何を言っているのか、聞こうともしませんでした。せつせと、小さいパンを七つと、水さしにいっぱいの水を用意していました。そして、それを私に持たせて、穴の中へつき落とし、石のふたをしてしまいました。

私はたった一人、暗い穴の中に、とじこめられてしまったのです。しばらくの間は、泣くにも泣かれませんでした。

それから七日の間は、ともかくも、少しながらもパンと水がありましたから、生きていたことができました。しかし、それもとうとうなくなってしまう時、私は、いよいよ死ぬのだなと思いました。

その時、急に、ほら穴の向うがわに、何か生きた物がとびこんで来たのが、目に入りました。そして、その小さな、ねずみ色をしたものが、私の前をびよんととんで行きました。

私は、はっと立ち上りました。そして、そのあとを追いました。すると、まもなくそれが、岩のわれ目の中へ入って行きました。私もまた、思いきって、その中へとびこみました。

中は大へん、きゆうくつでした。おしつぶされるような思いをしながら、なおもそのあとをつけて行きました。そして、これは、ずいぶん来たもんだな、と思った時でした。気持のいい海の風が、熱くなっていた私のほおに、さつと吹いてきたのです。まもなく私は、ほら穴からぬけ出すことができました。そこは、青々とした空の下の海べでした。

私がついて来た、小さなけものは、きつと、この道から入ったのでしよう。それで、出る時、私に道案内をしてくれたようなものでした。

それからまた、私は勇気を起して、もと来た道へ引き返しました。そして、ほら穴の中にちらばっていた、寶石を拾いあつめ、それを、こうりにつめて、また海べへ出て来ました。そして船が来るのを待つことにしました。

一日じゅう私は、じつと沖を見つめていました。

やっと次の朝になって、うれしや、とうとう一そうの船を見つめることができました。私は、さつそく、ずきんをといてふりました。それから、大きな声で呼びました。すると、まもなく、ボートがおろされて、私の方へこいで来ました。「どうして、こんなところへ、いらっしやったのです。私たちはまだ、ここの海岸に人がいたのを、見たことがありますよ。」

と、ボートの水夫たちが言いました。

その時、私はどうしても、墓穴から出て来たのだとは、言うことができませんでした。もしも、もとのところへつれ返されたら、大へんだと思ったものですから。……それで、

「二三日前、難船して、やっと、このこうりだけ持って上ったのです。」と、言っておきました。

つごうのいいことには、水夫たちは、もう何にも問ひませんでした。そして、すぐにボートをこぎ出して、私を本船へつれて行ってくれました。

こんなふうにして、また無事に帰って来ました。もちろん、前よりも一そう金持になりました。そして、あんなおそろしい目にあつても、助かつたとは、まあなんてありがたいことだろう、と思つたのであります。

ここで、シンドバッドはやめました。そして、ヒンドバッドは、また百円もらい、またあすの晩も来るように、その時は五度めの航海の話をするから、と言われました。

#### 五度めの航海の話

さあ、これから、五度めの航海の話をはじめようと思ひます。(あくる晩、みんながテーブルのまわりに腰をかけた時、シンドバッドは、こう口をきりました。)

ご存じのように、今まで、ずいぶんひどい目にあつていながら、私のぼうけんずきは、やつぱりやみませんでした。家の中にじつとしていることがじれつたくて、またまた、海へ行きたくてたまらなくなりました。

そして、こんどは、ひとの船に乗らないで、自分の船を作りました。そうすれば、どこへだって、行きたいと思うところ

ろへ行けますし、したがって、したいと思うことをやって、商売ができるわけです。

さてこの船は、かなり大きゆうございましたので、ほかに五六人の商人も乗りこんでもらいました。そしてまた、海へ乗り出しました。

それから、五つ六つの港へつきました。商売は、とんとんびようしにはこびました。

するうち、ある日のこと、ふしぎな白い円屋根のある、沙漠さばくのような島へ来ました。私はすぐに、ははあ、ロックの卵だなどと思いました。しかし、ほかの人は、まだ、だれも見たことがないというのです。そして、ぜひ見てゆきたいから、上らせてくれというのです。仕方がないので、ゆるしました。

その人たちは、近づいて行って、ふしぎそうに見ていました。ちょうどその時は、ロックのひなが今にもかえりそうになっていた時で、少し口ばしで、からを破ろうとしておりました。

すると商人たちは、私がとめるのも聞かないで、この卵をこわしてしまいました。そして、ひなのロックを引き出して、りようりをしはじめました。私は、そんなことをすると、きつとあとでこわい目にあうにちがいないから、およしなさい、およしなさい、と言ってとめました。しかし商人たちは、かまわずどんどん、いろんなごちそうに作っていました。

すると、それからすぐでした。急に空がまっ暗になって、あのロックの大きな黒いつばさが、私どもの頭の上へおおいかぶさってきました。

私たちは命からがら船へ帰りました。船長は、さっそく船を出しました。親鳥が大へんおこっているということが、わかりましたから。

おそろしい大きな鳥は、すぐに海の上へ追っかけて来ました。空は見る見るまっ暗になってしまいました。見上げると、大きなつばさがぴゅーんぴゅーんと風をきっています。とがった爪の間には、大きな石を、いくつもいくつも持っていました。それは石というよりも、岩と言いたいくらい大きなものです。

船のまへ来た時、持っていた石を一つ落しました。石はびゅーつとうなりを立てて落ちて来ました。さいわい、それは船にはあたりませんでした。すぐ近くの海がまっ二つにさけて、船のまわりには、海の底そこの砂のまじった波が、まるでかべのように立ち上りました。

やれうれしやと思つて、上を見上げると、まあどうしましよ、もう一羽、ロックがやって来ているのです。そして、しつかりとねらいを定めて、今にも石を落そうとしているのです。

ああ、とうとう船はだめでした。みじんにくだかれてしまいました。つぶされて死ななかつたものは、海の中へほうり出されて、波のまにまに沈んでゆきました。

しかし、運のいいことには、私は、浮いていた板にとりつくことができました。そして、足をぶらぶらさせているうち、ある島へつきました。

ほんとうに全く、この島にこそは、私はおどろいてしまい

ました。きっと、世界で一ばん美しい島だろうと思います。  
今まで、たべたこともないような、おいしい果物や、それはそれは美しい花が、そこら一面にあつて、きれいな小川が、さらさらと流れていました。

私は、これまでのおそろしさも、つかれも忘れてしまつて、涼しい木かげに休みました。

あくる朝、散歩かたがた、果物を取りに出かけました。そして、何だかあわれに見えるおじいさんが、小川のつつみに、じつとすわっているのに会いました。その人は、大そう年をとっているらしいのです。そして、さもさも弱っているようでした。私は大へんかわいそうになつてしまいました。それで、

「もしもし、ここで何をしていらつしやるのですか。難船でもなすつたのですか。」  
と、聞いてみました。

けれども、そのおじいさんは、悲しそうに首をふつただけでした。そして、この小川を渡らせてくれと、手まねでたのみました。

私は、きげんよく、よろしいと言つて、しゃがんで、その人を肩ぐるまにのせました。おじいさんは、思ったよりも重うございました。

私は小川を渡りました。それから、その人をおろそうとしました。するとどうでしょう、おじいさんは、おりようとはしないで、両方の足でますます私の首を強くしめていくのです。私は息ができなくなりました。そしてとうとう、あつと

言つたきり気をうしなつてしまいました。

それからしばらくして、気がつきましたけれど、やっぱりおじいさんは、私の肩にまたがつていました。そして、やせたとがったそのひぎで、私をうんうんつきはじめました。それがとても痛いのです。私はたまらなくなつて、起きて、また歩きはじめました。そして、その人が行けという方へ行くよりほか、どうにもしようがありませんでした。

それよりは、毎日々々、口では言えないほどの苦しみをしました。一分間も、へんなおじいさんは、私の肩からおりようとしないのです。私が寝ている時でも、そうなのです。そして、はじめのように、とがったひぎで、うんうん私をついては、おつ立ってゆくのです。そして、自分はしよつちゅう、果物を取つてたべているのです。私も、もとより取つてたべました。そうしなければ、お腹がすいて、死んでしまいそうですからね。

さて、ある日のこと、私どもは、大へんたくさんひょうたんがなつてるところへ来ました。そして、そのうちにたつた一つ、中がからになつて、ひぼしになっているひょうたんがありました。私はそれをとつて、その中へ、ぶどうの汁をしぼりこみました。そして、日のよくあたりそうなところへ、ぶらさげておきました。

それからまた、あちらこちらと歩きまわつて、四五日たつてから、ひょうたんのところへ行つてみますと、どうでしょう、おいしいおいしい、ぶどう酒ができていますではありませんか。

私は、大よろこびで、ぎゅうぎゅう飲みました。すると、急に元気が出てきて、何だかうれしくなりました。そして、思わず歌をうたったり、おどったりしました。

肩にいたおじいさんは、びっくりしてしまいました。そして、手まねで、自分にも飲ませてくれ、と言いました。私は仕方がないので、ひょうたんを渡しました。

そのひょうたんは、大へん大きなものでした。それで、お酒もずいぶん入っていたわけです。おじいさんは、それを一しずくも残さないまで、飲んでしまいました。それから、へんな声で、何かしゃべりはじめました。そして、しだいに、足をゆるめてゆきました。

私は、この時とばかり、うんと力をこめて、おじいさんを、地面の上へほうり出しました。おじいさんは、投げ出されたまんま、起き上ろうともしませんでした。

私は、やつと重荷おもいをおろして、せいせいしました。そして、にこにこしながら、海べの方へ歩いて行きました。

ちょうど海へには、五六人の水夫が、たるを持って、水をくみに上って来たところでした。私を見て目をまるくしながら、

「お前さん、こんな島へ、何をしに来たんだね。」こうたずねました。

私は、船がこわれてからの、いちぶしじゅうを話しました。すると、その人たちは、ますますおどろいてしまいました。そして、

「そんなあぶない目にあっても、助かったなんて、まあ、な

んてお前さんは、運のいい人なんだろう。だが、その肩のつかってたというおじいさんはね、海じじいと言って、そいつにつかまったが最後、助かりっこはないんだよ。」

と、言いました。それから、私を船へつれて行きました。そのうち、船は大きな港につきました。その港の町の家は、みんな石で作ってありました。

そこで、今まで大へんしんせつにしてくれた一人の商人が、私に、みんなと一しょに、やしの実を取りに行かないか、とすすめました。そして、

「これをお持ちなさい。」と言って、大きな袋ふくろを渡しました。それから、

「けっして、みんなにはぐれて、かってなところへ行っちゃいけませんよ。みんながするようにするんですよ。」と、言いました。

さて、それから私たちは、ずいぶん遠い、やしの木の森へ行きました。

やしの木は、大そう背が高く、まっすぐで、おまけに幹みきがすべすべしていました。私は、これでは、とてもおぼれないだろうと思いました。そして、いったいどうして、実をとるのだろうか、と、待っていました。

それから、みんなは、うんとやしの木のそばへ近づきました。その時、私は、木の枝に、猿さるがたくさんおぼっているのに、気がつきませんでした。そして、その猿は、私たちを見つめるが早いか、ぐんぐん上の方へのぼってゆきました。すると、みんなは一せいに、この猿に向って、石を拾っては投げ、拾

つては投げはじめました。

## 六度めの航海の話

私は、ずいぶんひどいことをすると思いました。それで、「どうして、そんなことをするんです。猿は何にも、悪いことなんか、しやしないじゃありませんか。」と、聞きました。

しかし、すぐに、そのわけがわかりました。猿が、やしの実をもいで、どんどん、こちらへ投げはじめましたから。

私たちは、大いそぎで、そのやしの実を拾って、袋へ入れました。それから、またまた石を投げました。すると、猿も、ますます、やしの実を投げてよこしました。

みんなの袋がいっぱいになってから、町へ帰りました。そして商人に売りました。

私は、それからまもなく、バクダッドへ帰って来ました。帰りみち、方々の島へよって、はつかだの、きやらの木だの、真珠だのを買いあつめました。

そして、家へ帰ってから、それらの品々を売りました。すると、どうして使っていいかわからないほど、たくさんのお金が、手に入りました。

ここで、シンドバッドは、ごちそうを持って来るようにと、言いつけました。そして、ヒンドバッドが家へ帰る前に、また百円やるようにとも言いました。召使はその通りにしました。

次の夜、たくさんのお客さまと、荷かつぎのヒンドバッドとが、いつものところへ腰をかけた時、シンドバッドは、六度めの航海の話をはじめました。

こんどは、まる一年家にいました。その間、また航海に出るしたくをしていました。友達や、しんるいの者たちは、行かせまいとして、いろんなことを言って、引きとめにかかりましたが、私はどうしても、しょうちしませんでした。まもなく、こんどは、うんと長い航海をするつもりで、出かけました。

けれども、この航海は、はじめから、つごうよくゆきませんでした。すぐに、ひどい大あらしにあつて、風のまにまに、あちらこちらと流されたあげく、とうとう、船長も、水先案内も、どこをどう走っているのか、だんだん、たよりなくなつてゆくばかりでした。

すると、ある時のこと、にわか船長が、ずきんをぬぎ捨てたかと思うと、ぐんぐんかみの毛を引きむしって、気ちがいのようになつてしまいました。

みんなは、びっくりして、ばらばらつと、船長のそばへかけよって行きました。

「どうしたんです、どうしたんです。気をしっかり持つてください。」と、てんでに言いました。

すると船長は、

「もうだめです、もうだめです。船は、あぶない潮の流れの中へ入ってしまいました。もう二三分したら、何もかも、みんなにくだけてしまうでしょう。」と、言ったのでした。

全くでした。船長の言葉が終るか終らないうちに、船は、きみわるく、すうーっと走り出したかと思うと、見る見る、けわしい山のすその、岩の折れかさなつた海岸へ、どんとつきあたってしまいました。そして、粉みじんになつてしまいました。

けれども、みんな、ふしぎに助かりまして、つんでいた荷物と、少しばかりの食べ物と一しよに、岩の上へ打ち上げられたのです。

海岸には、難破船なんぱせんのかけらと、まっ白になつた骨とが、たくさんちらばっていました。

船長は悲しげに、

「さあ、皆さん。死ぬ用意をしましょう。今までに、この海岸に打ち上げられて、助かった人はないのです。ごらんの通り、後はとてもおぼることのできない山ですし、また、助け船が来ることのできる場所でもありませんから。」と、言いました。

しかし、そうは言っても、食べ物をみんなに分けてくれました。ともかくも、生きていられるかぎりには、生きていた方がいいと思つたからでした。

さて、この島で私がおどろいたことは、大へんきれいな川が、山から流れ出ているのですが、それが、海へ流れ入らないで、海岸にそつて少し流れてから、また、山すその岩でできていて、ほら穴の中へ流れこんでいることであります。

そして、そのほら穴の中をのぞいてみますと、その入口の岩は、宝石がはめこんであるように、たくさんきらきら光つて

います。川底にもダイヤモンドだの、宝石だのが、ちらばっていました。それから、海岸の、どんなすみっこのようなところにも、難破船から打ち上げられた荷物が、ころがっていました。

さて、私の仲間は、食べ物がなくなるにしたがつて、一人々と死んでゆきました。それを私は、次から次とやうずめてやりました。

そして、とうとう、私一人になつてしまいました。私はもともと、何でも、ほんの少ししかたべないたちでしたから、それで私の食べ物、一番おしまいまで残っていたのであります。

「ああ、悲しいことだ。私が死んだら、だれがうずめてくれるのか。ああ、どうしてももう、自分の国へ帰ることはできないのか。」

ある日のこと、そんなことを思いながら、川のふちを歩いていました。そして、岩穴の中へ流れこんでゆく水を、じつと見つめていました。そのうち、ふと、ある考えが浮かびました。

それは、この川は、一たんは山の中へ流れこんでいるけれど、きつと、またどこかへ流れ出ているにちがいない。そして、この川を下くだつてみたら、ひよつとしたら、助かることができるかもしれない、ということでした。

それから、急に元気が出てきて、海岸にちらばっている、木や板を拾つて来て、丈夫ないかだを組みました。そして、たくさんたくさんのダイヤモンドだの、ルビーだの、難破船の荷物だ

のを、つまみました。それから、忘れないで、少し残っていた食べ物もつまみました。

そして、よくよく気をつけて、いかだを岸からはなしました。

すると、すうーっと気持よく走り出して、すぐに、まっ暗なほら穴の中へ入りました。どんどんどんどん、私はそのまっ暗な中を流れてゆきました。川幅は、だんだんせまくなつて、天じょうも、しだいしだいに低くなつてゆきました。そして、頭をごつんごつんと打って、だんだん苦しくなりました。それで私は、いかだの上へぺちゃんこに、腹ばつてしまいました。

やがて食べ物も、とうとうみんなたべてしまいました。ここどこそ、いよいよ死ぬのだ、と私はあきらめました。そして、いつのまにか、ねむってしまいました。

何時間も何時間も、そのままでしたらしいのです。何だか、がやがやいう声がするように思つて、私はふと、目を開きました。

ああ、その時、どんなによろこんでとび起きたか、お察しください。私の目に、青々とした大空が入ったのです。川はずいかに、広々とした、たんぼの中を流れていました。

へんな声だと思つたのは、黒んぼが大勢よつてたかつて、私のいかだを、土手の方へ引っぱつていこうとしていたのです。

私には、黒んぼの言っていることが、ちつともわかりませんでした。しかし、その中にたった一人、アラビヤの言葉を

話せる男がいました。それが、こう言うのです。

「まあ、しずかにしていらいっしやい。……あなたはいつたい、だれですか。どこからいらつしたのですか。私もはこの国の者です。たんぼへ出て働いていますと、いかだが流れて来て、その上にあなたがねむつていらつしやるので、お助けしたのです。さあ、どうか、ここまでいらつしやつたわけを話してください。」

「ありがとう、いや、どうもありがとう。お話ししましょう。ですけれども、その前に、何かたべる物をくださいませんか。お腹がへつて、声が出そうもないのです。」

黒んぼたちは、すぐに、食べ物を持って来てくれました。それで、私はやつと力がついて、気分もよくなりましたので、何もかも、くわしく話してやりました。

すると、みんなは、  
「この人を、王さまのお目通りへ、つれて出よう。」と、口をそろえて言いました。

それから、私に、王さまはセレンジブさまというお名前です、世界じゅうで一番えらくて、一番の金持だと、話して聞かせました。

私は、よろこんで、ついて行くことにしました。もちろん、寶石などの入れてある、こうりも持つて行きました。

セレンジブ王の御殿は、大へんりっぱなものでした。私は、まだ生れて一度も、あんまりっぱな御殿を見たことがありません。

王さまは、大そう私をいたわってくださいました。そして、

私の申し上げる話を、大へんおもしろそうにお聞きになりました。

そして、私が、どうぞ自分の国へ帰らせてくださいませ、とお願ひしますと、すぐに、船を出すようにと、家来にお命じになりました。それから、ご自身で、バクダッドの王さまへあてて手紙をお書きになって、私には、りっぱなみやげ物をくださいました。

こんなにして私は、バクダッドへ帰って来ることができたのであります。

そしてすぐに、カリフさまの御殿へ行つて、手紙と、セレンジブ王からいただいたみやげ物とを、さし上げました。

「まあ、このコップは、たった一つのルビーをくりぬいて、こしらえたものじゃないか。おやおや中には、まあ、りっぱな宝石で、もようがかいてあるんだな。おや、これはまた、象でものみそうな、大きな蛇の皮じゃないか。ああ、背中もんの紋もんがまるで、金のように光ってるな。これさえあれば、どんな病気だつてなおせる。」

こんなふうふうに、カリフさまは、手紙と、みやげ物を持って、大よろこびなさいました。それから、

「さあ、シンドバットや、セレンジブ王が、どんなにお金持で、どんなにりっぱであるか、話してごらん。」と、おっしゃいました。

私は、

「陛下、それは、とても私のつたない言葉では、申し上げることができないかと存じます。セレンジブ王は、いつも大き

な象に乗つておいでになります。おそばには、金色の着物を着た千人の騎兵きへいが、つかえているのでございます。そして、王さまの金のほこには、エメラルドでかざりがついております。まあ、申してみれば、ソロモン王のような、くらしをあそばしていらつしやるとでも申しませうか。」

王さまは、熱心にお聞きになりました。そして、私に、ごほうびをくださいました。

私は、家の者や、友達が待っているだろうと思つて、大いそぎで家へ帰りました。それから、持つて帰つた宝物を売つて、貧乏人にほどこしをしました。

その後は、しずかに、楽しい日をおくりましたので、今までの、おそろしかつたことや、つらかつたことは、遠い昔のゆめではないかとさえ、思うようになりました。

これで、シンドバッドは、第六航海の話を終りました。そして、お客さまたちに、あしたの晩もまた来てください、と言いました。

あくる晩、また、お客さまが、みんなテーブルについて、ごちそうがすんだ時、シンドバッドは、いよいよ一番おしまいの航海の話をはじめました。

### 一番おしまいの航海の話

さて、六度めの航海の後は、私はもう、けつしてどこへも

行くまいと、心にきめていました。もう、ぼうけんがしたいとも思いませんでした。

しかし、ある日、友達を呼びあつめて、ごちそうをしています。召使の一人が入って来て、

「ただ今、カリフさまのお使がお見えになって、だんなさまにお目にかかりたい、とおっしゃいますが。」と、言うのです。

私は、お使を通させて、さて、

「どういふご用でございましょうか。」と、聞きました。

するとお使は、

「カリフさまが、お召しでございます。すぐにおいでください。」と、言いました。

仕方がないので、私はすぐに御殿へ出かけました。そして、王さまの前に出ました。

「シンドバッドや、ひとつお前にたのみたいことがあるのだがね。それは、ほかでもない。わしは、セレンジブ王に、手紙と、おくり物とを、さし上げたいと思うのだが、お前、持って行ってくれまいか。」

と、王さまがおっしゃいました。

私は、はっと首をうなだれました。私の顔は、きつと、死んだ人のように、まっ青さおになっていたことでしょう。

「陛下、せっかく陛下のおたのみではございますが、私は、もうけっして、旅へは出まいと、神さまにお約束しましたので。」

やっと、こうお答えしました。それから、ぼつりぼつりと、

今まで六ペんの航海で出あった、いろいろさまざまなぼうけんのお話をしました。

王さまは、びつくりなさいました。けれども、どうしても、この使にだけは行ってくれ、とおっしゃるのです。

おことわりがしきれなくなって、私は「しょうしました。」と申し上げてしまいました。

カリフさまのお使の船は、バクダッドを出立しました。それから、おだやかな航海をつづけた後、セレンジブの島へつきました。

町の人たちは、大よろこびで、迎えむかに来てくれました。

私は、さっそく御殿へうかがって、役人に、私の来たわけを話しました。

役人は、私を御殿の中へつれて行きました。やがて私は、王さまの前に出ました。

王さまは、

「おお、シンドバッド、よく来てくれたね。わしは、あれからも時々お前のことを思い出して、もう一度会いたいと思っていたんだよ。」

と、おっしゃいました。

私は、カリフさまのお手紙と、見事なおくり物とを、さし上げました。

王さまは大へんおよろこびになりました。

二三日いた後、私は帰ることにしました。そして、自分の国をさして、船をいそがせました。けれども、またまた、帰りの船で、悪いことに出あってしまったのです。

ほかでもありません、私たちは海賊かいぞくにあったのです。そして、船はとられるし、殺されなかった者は、みんなどれいに売られてしまいました。

私もまた、ある金持の商人のところへ、どれいに売られてしまいました。

商人は、私を買って帰ってから、

「お前は、職人かね。」と、聞きました。

「いいえ、商人です。」と、私は答えました。すると、

「では、矢を射ることができかね。」と、聞きました。

それで私は、できません、と言いますと、商人は、私に弓と矢を渡して、大きな森へつれて行きました。それから、木へのぼれと言いました。そして、

「そこで、じつと番をしていて、象がやって来たら、射るのだよ。もし、うまくあたったら、すぐに知らせにおいで。」と言って、帰って行きました。

一晩じゅう、私は見はっていました。けれども、とうとう来ませんでした。

しかし、夜が明けてから、とてもたくさん象が、ぞろぞろとやって来ました。

そこで私は、矢つぎばやに、五六本、射てみました。

すると、大きな象が一びき、ごろりと地の上へたおれました。ほかの象はおどろいて、みんなにげて行きました。

私は、木からおりて、主人の商人のところへ、知らせに行きました。

それから、また主人のつれ立って帰って来て、大きな象を

地にうずめ、そこにしるしをつけておきました。こうしておいて、あとで、きばを取りに来るのです。

その後、ずっと私は、この仕事ばかりさせられました。そのうち、またこわい目にあうことになりました。

ある晩のこと、象が、にげて行くと思いのほか、私ののぼっている木のまわりを、とりかこんで、大きな声でうなりながら、足ぶみをしはじめたのでした。それはまるで、大じしんのようにでした。そして、とうとう木の根を、引きちぎってしまいました。

木は、めりめりと大きな音を立てて、たおれてゆきました。私は、あまりのおそろしさに、気をうしなってしまうました。

しかし、すぐに気がつきましたが、その時、象は、その鼻で私をぐるっとまいて、高く持ち上げ、ぴよんと背中にのせました。私は一生けんめいに、背中にかじりつきました。

すると象は、私をのせたまま、歩き出しました。

やがて、森をぬけて、小山のふもとにつきました。この小山には、私がおどろいてしまいました。白くさらされた象の骨と、きばとで、うずまっているのです。

象は、しずかに、私を地の上へおろすと、どこかへ行ってしまいました。

私は、びっくりして、この象げの山を、しばらく見つめていました。そして、象がこんなにかしこいちえを持っているのに、感心したのでした。

象は、私をここへつれて来て、自分たちを殺さないでも、こんなにたくさん象げが取れるということを、教えるつも

りだったのに、ちがいありません。

私は、ここはきつと、象の墓地ぼちなのだろうと思いました。

私はさっそく、きばを二三本拾って、町へいそいで帰りました。主人に、このことを話して聞かせたいと、思ったものですから。

主人は、私の顔を見ると、走って出て来ました。そして、「まあ、シンドバッドや。私は、あの木の根が掘り返されていたもんだからね、お前は、死んだものだど、思いこんでいたのだよ。もうもう、お前には会われなかつぱかり、思っていたのだよ。」と言って、うれし涙なみだを流しました。

私は、さっそく、象げの小山の話をしました。

主人は、それを聞くと、よろこんで、とび上りました。

それから二人で、一しょに小山へ行きました。私の言った通りだったものですから、主人はますます目をぱちくりさせて、しばらくは物さえ言いませんでした。

やがて、

「シンドバッド、もうお前を、どれいでもなくしよう。これからは、お前のすきなようにおし。それから、この象げを、お前も取ったらどうだね。うんと取って、お金をもうけたらいいだろう。……ああ、今まで、私のどれいも何人も何人も、この象がりのために命を捨てたけれど、もうもうこれからは、そんなことをしなくても、よくなつたんだねえ。まあ、これだけの象げがあつたら、今に島じゅうが大金持になつてしまふ。」

と、言ったのでした。

それで私は、もうどれいでもなくなりました。そして、大へんていねいにしてもらいました。

やがて、象げ船が入って来る時分になつて、私は、この島にさようならをしました。そして、象げと、ほかの宝物を船にいっぱいついで、ふるさとをさして帰って来ました。

バクダッドにつくと、私はすぐその足で、カリフさまの御殿へまいりました。

カリフさまは、私を見て、大へんおよろこびになりました。そして、

「シンドバッドや、わしは、ずいぶん心配していたよ。何かまた、へんなことが起つたのではないかと思つてね。」とおっしゃいました。

それで私は、海賊かいぞくの話と、象の話とを、お聞かせしました。カリフさまは、びっくりなさいました。そして、私の七へんめの航海の話を、すっかり、金の字で書きしるして、カリフさまのお宝物として、だいじにしまっておくようにと、家来にお言いつけになりました。

それから私は、家へ帰つて来ました。そして、それからは、ずっと、のどかに、家にくらしています。

これで、シンドバッドの航海の話は終わりました。それから、シンドバッドの方へ向いて、

「さて、シンドバッドさん。これで、どうして私が、こんな金持になつたかが、おわかりになつたでしょう。もう、私が、こうして、のんきにくらしているのを、不ふつごうだとは、お

思いにならないでしょうな。」  
と、言いました。

すると、ヒンドバッドは、シンドバッドの前へ出て、ていねいにおじぎをして、その手にキッスしました。

「だんなさま、あなたさまは、そんなつらい目におあいになっても、よくがまんをなすったからこそ、こんなお金持になりになったのでございます。あなたさまのなすった苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>にくらべますと、私の苦勞なんか、足もとへもよれないほどでございます。あなたは、きつと、行末<sup>ゆくすえ</sup>ながく、お仕合せにおくらしになるでございましょう。」  
と、言いました。

シンドバッドは、この答えを聞いて、大へんよろこびました。そして、ヒンドバッドに、これから毎晩、ごちそうをするから、たべに来るように、と言いました。そしてまた、金貨を百円やりました。

それで、その後、ヒンドバッドは、とうとうシンドバッドのぼうけんの話を、残らずおぼえてしまいましたとさ。